

徳永直文学碑

すまきに寄せ

(三)

- | | |
|--------------|------|
| 徳永 直氏の印象 | 市原政男 |
| 徳永文学の魅力 | 木村一信 |
| 徳永 直の思い出 | 後藤是山 |
| 徳永 直をおもう | 佐多稲子 |
| 徳永さんの文学 | 霜多正次 |
| 徳永さんのこと | 手塚英孝 |
| 「最初の記憶」との出会い | 松本修一 |
| 「文学碑」建立の反響と私 | 岩本 税 |
| 徳永 直文学碑登場 | 高光義明 |

徳永直文学碑をつくる会



●德永直文学碑

1977年2月建立 熊本市立田山登山口



据付け

11.15 熊本民報提供

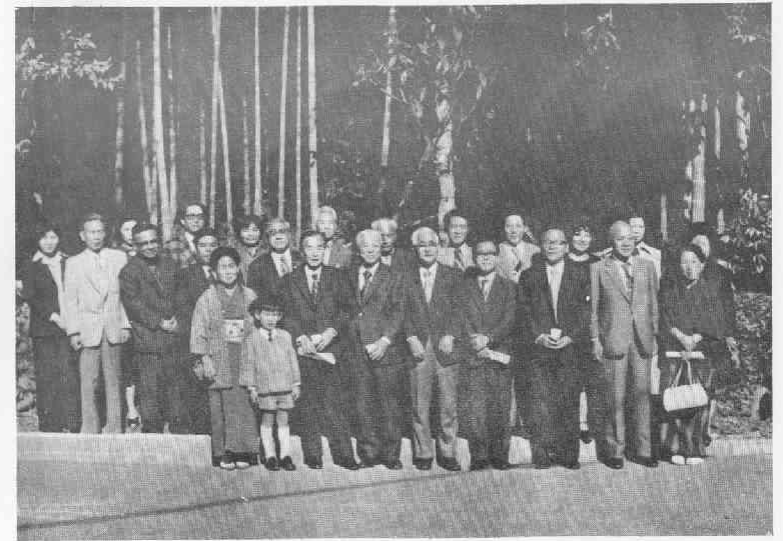


鋤入れ 右 大野タツメさん 左 高光義明
5.1.10.31 熊本民報提供



除幕 右より大野天土君 徳永あかねちゃん 高光美樹、美香

5.2.2.12 熊本日日新聞提供



起工式に集った人々

5.1.10.31 熊本民報提供



謝辞をのべる長男徳永光一さん

西日本新聞提供



除幕式に集った人々

熊本民報提供

徳永 直氏の印象

市原 政男

それは大正七年頃の事、私が十五才で、ある印刷工場の見習小僧をして居た時の事。ある日の昼食時間に先輩の角田氏が見知らぬ男と二人でやって来て、こんな処に居ても仕方がないから、俺達の会社へ来いと当時の九州日々新聞社へ入れてくれた。給料もたしか倍位に昇給したと思っっている。その時角田氏と同行して来た男、その男が、同氏の従兄であり、友人であった徳永氏ではなかったかと思っ

ている。何故この様な書き方をするのかと言え、当時同社は新聞部と、活版部とがあつて自分は活版部へ配属され、その後先輩達と会う機会がなく、先輩達も私も同社を退社してしまつて、遂に徳永氏であつたかどうかを確認する事が出来なかつたからである。

次に会つたのは、それから十五、六年たつてから後の事である。

当時徳永氏は既に作家となり、例の「太陽のない街」で一躍大きな存在となつていた。

又もう一人の先輩角田氏は、日刊熊本日々新聞の社長となつていた。

自分は関西、東京と各地を流れ歩き、小さな雑誌記者や、編輯事務に携つていた。

ところが家庭の事情で帰郷しなければならなくなって、帰っては来たものの、深刻な不況時代で何の仕事もなく、家庭を背負って弱り切っていた。その時である。角田先輩が「新聞社長」となっていると言う事を知って、何とかならないものかと、このこと出かけて行った。

同氏は立派に社長らしくなっていたが、態度は少しも昔と変わらず「よく来た」「友あり遠方より来たる亦楽しからずや」と喜んでくれた。

氏は私の話を聞くと、即座にそんな事なら暫らく俺の仕事を手伝って見ないかと云ってくれた。その時の嬉しかった事は未だに忘れる事は出来ない。

同社の社会部記者として働いていた時の事である。

或る日、身体のがっしりした男が「やあ」と云って社長を訪ねて来た。

それから毎日の様に午後になるとやって来て、角田氏と談笑しながら、将棋をさしたり、して行った。

如何にも人懐い温い暇の持ち主で、何処となく、印刷工の臭いのある、重量感のある男である。一見してこれは、いろいろの苦難乗り越えて来た、苦勞人に違いないと自分は感じていた。

ところが、これが今有名な徳永直氏だと角田氏から紹介されて、驚いてしまった。

自分が知っている作家達とは全然違った、印刷工そのものの臭を持った男、如何にも人間味豊かな男、それが徳永直氏であったのである。

自分は文学者としての徳永氏より先に人間徳永直を先に感じて居たのである。

三回目の会談は、その後亦十四年後の事である。これは偶然の出会いではなく、是非同氏に会う為の上京でも

あったのである。

終戦後いち早く結成した、熊本印刷労働組合を、全日本印刷出版の熊本県支部として改組して、その全国大会に県支部代表として、委員長の辻山繁重（故人）と書記長の私が出席する事になった時の事である。

ひどく交通事情の悪い時で、窓から出入しなければならぬ程のすし詰め列車に乗って上京したのである。そして大会が終るや否や第二の目的の郷土の大先輩徳永直氏を訪ねる事になった。

徳永氏はもう大家であり、同行の先輩辻山氏は徳永氏とは在京時代同じ職場で働き、山川均氏等の指導を一緒に受けた同志でもあったらしいので、ひどく懐しがり、何処を何うして探し当てたかは、今は詳らかに憶えていないけれども、兎に角ひどく苦勞してやっと探し当てた。

それはひどくそりした町で、思いの外小さな家であった様に思った。

玄関の格子戸に「執筆中に就き面会謝絶」と貼り紙がしてあり、誰れも家人が居そうに思えない程しん閑とした静かさであった。

これは留守かも知れないと、些かがっかりとしたが、思い切って戸をあげ、案内を乞うたら、意外にも氏自身がのっそりと姿を現わした。

一寸驚いた様に二人の姿を眺めていたが「やあ！辻山」と二人が同時に歓びの声を挙げた。

「さあ上れ」というので二人は遠慮なく上り込んだが、辻山氏が玄関の貼紙をさして、好いのか尋ねたら、氏は無難作に、「なに好いんだ、うるさいのであゝして置くのだ」と、笑い飛ばした。

私達が交る交る熊本の状態を話し、全印の大会に出席の為め、上京したのだと説明すると、氏は相恰を崩して、「よくやった、よくやった。熊本は仲間組織にくい処で、それまで纏めるには相当苦勞したろう」とねぎらっ

てくれた。

今家人が留守なので、と、自分で茶菓を出してもなし、友人達の話や、東京の話等をしてくれた。

話の合間にも終始笑を浮べ、あの特徴のある眼で凝っと見つめていた。

あの深い眼の色、幾多の苦難を乗り越えて来たであろう人間の重み、こゝでも矢張り私は印刷労働者としての奥の抜け切っていない人間徳永氏を深く感じたのである。
(元印刷工)

徳永直文学の魅力

木村一信

多くの人々と同様に、私の初めて接した徳永直の作品は「太陽のない街」であった。結末近く、主人公の一人である高校の運びとった行動には些かの不満を抱きながらも、そこに繰りひろげられた「大同印刷争議」のリアリティにはすっかり魅きつけられてしまった。動的な生氣ある文体もよかった。

しかし、その後、「最初の記憶」や「他人の中」「彼岸」「八年制」といった短編群を読み進めるうちに、以前とは全く異なるイメージを持った徳永直の姿が浮かびあがってきた。いわば、文学史的記述におけるプロレタリア文学作家のイメージではなしに、「私小説」作家ともよいようなそれであった。たとえば、「私は七才で小学校に入ったが、そのころはもういっばしの竹細工職人であった」と書き出された「最初の記憶」は、素朴でしつとりと落ち着いた文体で書かれており、要所に作品をひきしめる、作家の真情に溢れたさわりの言葉が配

置されていた。

しかしながら、これらの短編群は「私小説」と分類し、それで片付けてしまうにはあまりにも強すぎる感動が秘められている。ここには、平板な日常生活や愛欲の心情を吐露するという趣味は存していない。地にしっかりと足をつけ、生きることの重みを背負い、必死に耐えている日本の庶民を描く一人の作家がいるだけなのだ。公式主義者風の声高な主張もない。しかも、作品に登場する人間は社会に対して目をつぶっているのではない。文学碑に刻される言葉のように、「私たちはもっと労働について語らなければならぬ」と認識し、「労働の内容もつ内容は、現在語られている多くの恋愛よりも、インテリゲンチヤのある種の悩みよりも、ないしは消費生活の純潔さよりも、はるかに豊富で、人類を益するものである」と述べる如く社会に対し、人生に対し誠実に立ちむかおうとする人間なのである。この誠実さは作家徳永のそれなのであるが、ここに真の意味でのプロレタリア文学の基点があると言ってもよいように思う。私達は、このような徳永直についての思いを、より多くの人々に語り伝え、広げていきたいと願っているのである。
(徳永直研究会々員・熊本女子大学講師)

徳永直の思い出

— 後藤是山氏に聞く —

聞き手 中村青史
高光義明

—九州日日新聞社時代の徳永直について思出などごさいませんか。(年譜によれば徳永直が二度目の文藝工と

して九州日日新聞社に勤めるのは一九二〇年・大正九年のことであった)

後藤 私は編集局で中二階で仕事していましたし、徳永君たちは階下の工場の方で、その当時は特に面識がなかったわけではありません。ところで、あれは何時でしたか、高光さん。

高光 あら、あら、昭和三十一年の夏の頃でしたばい、徳永のなくなる二年前、最後の帰郷の折でした。

後藤 熊本駅のホームで、あの時のことは今もありありと想い出します。お互に名のりあって握手したのは、あれが最初の最後でしたなあ。

高光 あら、偶然でした。あっ後藤は山さんばい、と私が言うたら徳永も、わ、なつかしかけて言うてすな。

後藤 先生にはあの頃俳句を選んでもらって新聞に載せていたとか。

後藤 そうだったですな。文撰工の若いのに何人か文学青年がおりましてな。私が書いとる原稿は取りに来て、横で廻し読みしながら持って行きよりました。その中の一人に徳永君も居たんですな。

その頃の文撰工について何かおもしろい話はありませんか。

後藤 あります、あります、若山牧水・喜志子夫妻が熊本に来たことがあります。あれは確か来熊も二回目のときかと思えます。阿蘇に行きたかというので、私はその時編集長をやっとりましたが、金の工面ばして栃木温泉に連れて行きました。そこでの牧水と喜志子さんの歌を三、五首でしたが新聞社に送ったんですが、喜志子夫人の歌が一部書き替えられたんです。後で分かったんですが、文撰工の誰かが勝手に書き替えをやったのですな。

牧水夫妻の来熊は大正十四年の十一月でしたな。(徳永はその頃、東京で「あまり者」など書いていた。)ところで、その頃の文撰工はそんな勝手なことをやっていたのですか。

後藤 ええ、こんなこともあったです。某会社の給料がいくら上ったとか、ボーナスがいくらだとかいう記事が出る。するとそれに続けて「わが社も同様増額の見込みなり」なんて勝手にやる。あの時は、確か徳永君たちの仕業でしたよ。とにかくあの頃の新聞社の給料は安かったですからね。私なども安月給で朝は七時に出版社に帰りはいつも夕方の七時でしたよ。

後藤さんは若い頃は随分と元気のいい文章を書いておられたとか。

後藤 そうです。よく没になりよりました。スポンサーの気にいらんことば書いとるとかなんとかで。徳永君たちが私の文章に共鳴していたのも、そんないわば青春の情熱にですな。青年の不平不満を爆発させていましたから。

先程俳句の選で徳永直のが採られていたとか伺いましたが、文芸欄などですか。

後藤 いや、当時は文芸のページなんてものはなかった。文化部もなかったし、政治最優先で、読み物は講談のたぐい。でも、私はそんな中で俳句や短歌のスペースを精一杯とっていました。それでも一段の三十行ぐらい。そこに徳永君も出していたんでしょね、私はあまり覚えていないが、それにしても熊本駅での出会いは印象深かったなあ。

高光 下りホームでしたな、徳永は三角に行くときでした。

後藤 私は人吉に行くところだったと思います。

昭和五十二年一月二十七日

徳永 直をおもう

佐多 稲子

徳永直は、昭和初期のプロレタリア文学運動の意義と目的を、最も深く負って作家となった人である。先ず徳永は労働者であった。「太陽のない街」は、彼の動く共同印刷の大きなストライキの経験によって書かれ、それはナップの機関誌「戦旗」に連載された。いわば「太陽のない街」によって初めて日本の無産者芸術運動は労働者によるプロレタリア文学を持ったのである。

小学生のときから働いた徳永の生立ちに、私自身の経歴は似ているが、しかし私は労働者出身とは云えない。その意味で私はプロレタリア文学を厳密に考えるとき、徳永直を貴重におもった。「太陽のない街」は勿論、「他人の中」などを、題材だけではなく作品の質として、徳永らしい、あるいは徳永でなければ書けない、とおもうからである。「他人の中」などの主調が私に頼しくおもえるのは、徳永に似ている私の経歴によるところもあらう。この、似ている生立ちは、おたがいに気持の上でもどこかで親しくさせてもいた。

が、戦後の共に活動をしてゆく間には、政治的なことで一時、別の立場だったこともあり、また徳永の私生活上の問題に私も幾分の関りを持って辛いことがあったりした。が、そういうことでの徳永自身の苦痛は直接だから、もっと深かったにちがいない。一九五七年に私が十二指腸潰瘍で入院したとき、見舞いにきてくれた徳永が、「煙草をやめろ」と云ったのをおもい出す。自分もやめた、と云ったのだが、その次年のはじめに彼の方が先き

に逝ってしまった。腸癌などという病気に、私は徳永の苦痛を感じてしまう。個人的なおもいを書けばきりがないが、その気持もよくめて、徳永の文学碑が建つのを、私は、お世話の人たちにお礼を云いたいとおもう。はじめに書いたように、日本の文学の中に特別な位置を持つ作家として、徳永直の文学碑は、今後の人々に語りかけるであらう。

(一九七七・一・一七)

徳永さんの文学

霜多 正次

わたしは戦後すぐ、徳永さんの家を訪ねる機会が多かった。新日本文学会で出していた「勤労者文学」の編集長をしておられて、わたしはその編集事務を手伝っていたからである。

「勤労者文学」はしかし、そのうち「革命抜き勤労者文学」(小田切秀雄)論争や、財政難などから、廃刊になった。そのころ、徳永さんはよくわたしにこぼしていたものである。

日本では民主的な文学運動でも、勤労者の文学への理解が足りなくて残念だ。評論を書く人はみなインテリ出身だから、と。

徳永さんのその不満が、わたしにはわかる気がした。わたしは、徳永さんの作品では「最初の記憶」「はたらく一家」「八年制」など、昭和十年代の作品が好きである。そして、たとえば「最初の記憶」で、徳永さんはどう書いている。

「私はいま小説を書くやうになって、労働を最も尊敬し、労働する人々を最も正しく理解しようと努めてゐる。インテリゲンチヤの間に居る。私の不足な教養について種々の示唆や導きを与へてくれたインテリゲンチヤも、しかし、労働を深く味はつてゐない為、労働を単に物質的なもの肉体的なものと解釈し勝ちである」

徳永さんには、そのようなインテリゲンチヤにたいする不満やコンプレックスがたえずつきまといつていて、それが『勤労者文学』月刊への不満にもなつていたのだと思う。

徳永さんはよく「侍」というコトバを使う。自筆年譜でも、徳永という「姓は、もともとなかったが、明治維新後、水呑百姓も姓をつけることになったとき、役場書記に侍あがりの徳永という人があつて、おれの姓をつけてやるから有難く心得ろ、ということ、徳永ということになった」と書いてある。そして父辰次郎は「侍で、地主」の家の作男で、母ソメは「もつと大きな侍で、かたわら『商法』などやっていた家の女中であつた」と。

こういう日本社会の底辺の生活体験から、「侍あがり」の支配する社会を批判し、労働の「単に肉体的なもの」でない人間的な豊かさ・尊さを表現したのが、徳永文学の特徴であつた。しかしそのような文学は、日本のジャーナリズムではあまり評価されず、敬遠されがちである。全集ブームの現在でもなお、徳永直選集さえ刊行されていない情けなさである。

近代日本は侍によつて建國され、「侍あがり」によつて支配されてきた。そして人民大衆は國家への忠誠と貧しさを強制されてきた。そのような体制を變革するためにも、徳永文学はもつともつと顕彰されなければならぬ。

徳永さんのこと

手塚英孝

「太陽のない街」は、小林多喜二の「蟹工船」の後編がのつた「戦旗」から連載された。その母は発売禁止になつたし、その後も「戦旗」はたびたび発表になつたから、私などは、戦旗社版の本が出て、はじめてまとめて読むことができた。

徳永さんと知りあうようになったのは、それから六、七年たつて、私がおなじ世田谷の豪徳寺の近くに住むようになったからであつた。歩いて七、八分の近くだったから、私はときどき訪れた。徳永さんも、散歩の途中や、自転車にのつたりなどして、ときどき私の家にもえたりした。徳永さんは、折にふれて、労働者の生活を、手にとるように巧みに話してくれるひとであつた。貧しい百姓の家で生まれ、小学校にもろくに通うことができません、いろいろな労働をしながら、種字工になつた、徳永さん自身の体験も話してくれるのだったが、工場へ出かけたり、工場地帯を歩いて調べたり、労働者の下宿に寝とまりして話しあつたりしたときのことを、私に話してきかせてくれたりした。労働者の生活を語る徳永さんの口調には、いつもところからの親身さと、なんとなくいらだたしさをまじえたような特別なニュアンスがあつた。

戦後になって、「静かなる山々」を書いていたころ、徳永さんは、家から少しはなれた裏手の畑のひと隅をかき取り、野菜づくりをしていた。魚釣りにでかけたり、畑を耕したりするのが、そのころ神経がいらだつ徳永さん

の医者からもすすめられていたリクリエーションだった。肥桶のかたわらで、ニコニコして腰をのぼす徳永さんの姿は、まるで地に生えたような格好で、いままなつかしい印象となつてのこつている。

「最初の記憶」との出会い

松本修 一

私は「最初の記憶」を読んだ時の興奮を忘れることができない。徳永直という一般には無名に近い作家は私の脳裏に、野良仕事を手伝っていた幼い頃の記憶を鮮かに甦らせた。読むうちに主人公と私は完全に一体となつてしまった。

徳永の作品が文学史上、どのような意味を持つのか私には分らないが、彼の作品と思想は、文学にはあまり縁のない素朴な労働者たちにこそ、ほんとうに理解され親しまれるものである気がする。一口にプロレタリア作家と呼び、彼の作品なり思想なりを理解しようとする時、彼の作品の価値は半減してしまうだろう。彼の愛した肉体労働者はその労働の尊さを語る場所も言葉も持っていない。だからインテリゲンチヤは徳永の言うように「労働を深く味っていない為に、労働をたんに物質的なもの肉体的なものと解釈し勝ちである。」しかし、思想が労働の価値を生み出すのではなくて、労働そのものが思想を生み出すのである。私には多くの現代の人々が汗を流すことの尊さを知らずに、既製の思想に飛びつき、それを至上のものとしているように思える。私には多くのプロレタリア作家もまた、そのようだったような気がする。思想に引きつけられ、その手でペンを取り外部の弾

圧に屈せず多くの作品を書き、そしてそのために死んでいった「インテリゲンチヤ」もいる。それらは確かに尊敬に値する行動であったとは思ふが、私には親しみが感じられない。労働者とは一面を隔てたものを感じてしまふ。それにくらべ徳永は当局の弾圧に屈してしまつた。これは恥ずべき行為であったのかも知れないが、私はこのことに一庶民としての姿を見る。下層労働者にとっては、自分の生活を守ることが精一杯のことであり、自己の思想を守ることには誇りを感じていたり、自己陶醉したりする余裕はない。生活そのものの中で戦い、つかのまの安らぎの中に喜びを見出して生きていくのだ。

思想よりパンを求める者を蔑視する人は多い。しかし、パンを求めるのが下層階級者であり、また、そうでなくして生きてゆけないのである。徳永はそれを知っている。そして、そんな労働者たちにも「インテリゲンチヤ」のとうてい持ちえない、労働から得た素晴らしい言葉にならないイデオロギーがあるということも知っていてくれる。そんな徳永はたとえプロレタリア運動の旗手とはなり得なくとも、労働者たちの最良の仲間であつたはずだ。私はそんな徳永に限りない親しみを憶える。

労働の辛さと尊さを体で知ることこそが、何にもまして人間には必要なのだ。共産主義であれ、資本主義であれ、労働の生み出す尊さは何もかわりはしない。労働はどんなイデオロギーにも増して素晴らしい、豊かなものである。私には徳永がそんなことを語りかけてくれている気がする。そして彼のような「最初の記憶」を持つ自分の体験の意味を改めて感じさせてくれた。

(熊本大学工学部学生)

「文学碑」建立の反響と私

岩本 税

一月下旬のある日、東京の大学予備校に通っている教え子のO君から封書がとどいた。

「……前略……、昨日S君から徳永直の短編集を貰いました。聞くところによるとT子が三冊（T子の分と、S君の分と、僕の分）を持ってきたという話でした。新潮社から出版されている「小林多喜二・徳永直集」は高校時代に読みましたが、短編集の作品は初めてです。

S君は動いているだけあって、労働の重さが解っているらしく、しまいにこの短編集及び作者を誉めていました。僕の方は、あと一ヶ月で受験となります。受験が済むまでは何となく落ちつかないので、受験後に読みたいと思います。……中略……少額ではありますが、文学碑建立のために役立てて下さい。」

とあって、一千円札が同封されてあった。さらに追伸に「本読みました。改めて徳永直を認識したように思います。折あらば、他の作品も読みたいと思います。早く文学碑が立つとよいですね。」とあった。

それから日が経って、三月下旬のある夕方、さきのS君と、同じく東京のT大に学んでいるH子が訪ねてきた。二人共云うには、作品を読んだので、帰郷のついでに「徳永直文学碑」を是非見とどけてから上京したいのとのことだった。

私は「徳永直文学碑」建立運動にあたっては、活動の途中から発起人の一人に加えてもらった。昨年一〇月か

ら一二月までの三カ月間、私がかつてかわりをもった知人・教え子・父兄等約三〇〇人に対して趣意書をおくり募金を乞うた。その大多数の方々から応募していただき、恐縮しながら嬉しい限りだった。労働者作家徳永直のひたむきな生き方に共感された結果のことであろうと思う。そして、人間にとって、文学とはこれほどまでも重みをもつものかと痛感させられたのであった。

私自身は、この運動にかかわるまで、徳永直の作品については、さきのO君やS君以上の知識はもちあわせていなかった。いまや、数多くの人々の理解と善意に支えられて、ついに素晴らしい「文学碑」の建立をみた。これら人々に報いる私のみちは、計画されている「徳永直文学友の会」の設立や、徳永直の命日にあたる二月十五日を「孟宗塚」として記念会をもつことに、全面的に協力することしかないと思うのである。

(昭・52・3・26記)

徳永 直文学碑登場

高光義明

徳永直の文学碑が、熊本市の東北に当る立田山の登山口に建立された。

阿蘇に通ずる国道五七号線、熊本大学教養部の角より入って直線六〇〇米。正面に「椎の木」主宰安永信一郎さんの歌碑。右手の奥に細川ガラシヤ夫人を祀る泰勝寺。

春は桜・つつじ、秋は紅葉を尋ねての市民行楽の場でもあり、シーズンになると県内外の観光バスの往来も賑やかである。

竹藪を拓いた一段高い約五坪の敷地に、泰山木を背負うようにして巨大な八トンの安山岩が、赤煉瓦を敷きつめた床にどっしりと構えて、その正面に徳永の作品「最初の記憶」の一節が、はめ込められた黒御影石に鮮やかに彫られている。

碑石の左、や、下って畳半枚位の板碑には、蔵原惟人さんの撰による「経歴」が徳永の生涯とその業績を簡潔に物語っている。

「場所が良い」「バックの竹林が見事だ」。中には「徳永には勿体ない位だ」と云ってくれる人も二三に止まらない。

万更お世辞ばかりでもなさそうだ。

ある人は「奇蹟」だという。話が出たと聞いていたらアツという間に文学碑が建ってしまった、という。計画を始めて一年。実動に移ってから半歳余で、当初提唱した私でさえ、まさかこの様に事が順調に運ぶなど思ってもいなかったのである。二月十五日の二〇年忌に間に合わせたいと考えたのは事実だが、正直のところ何の確信もなかったのも事実である。

それが、徳永直の人と文学を知り、理解し支持してくれた全国数千人の人々の善意で見事に結実したので。

募金目標五〇〇万円。実は三〇〇万円ですべてを賄う心算が、目標の八〇%を超す額になった。

「短編選集」三〇〇冊。最初は製本屋にポツポツ納めて呉れ、ばい、と云っていたのに、これも発売以来六ヶ月で八〇%近くを消化し、増刷も考えねばならなくなりました。

文学碑は十月三十一日に起工。以来工事はトントン拍子に進み、暮の二十八日には工事担当者から引渡された。着工から六十日目である。

「徳永直文学碑」の話が出たのは六年前、関幸夫さんが共産党熊本県委員長として着任して永くない頃で、関さんがそう云っているということも県議の井上栄次さんから伝えられた。

関さんは宮城県出身。党の同県委員長を勤めたこともある。宮城は徳永のトシオ夫人の生地。徳永一家はトシオ夫人の死後一時期疎開していた。

徳永の死後、同県登米町の古い農民運動家がかつて作家同盟員でもあった首藤直一郎さん等が中心になって、「文学碑」の話が進められたが、支障があつて実らなかつた、と云うことも聞いた。

「生地の熊本に文学碑を！」
井上さんからその話があつた時、正直のところ私はハ

ッと思った。

昭和六年、東京での徳永直との出会いが、今日の私の出発点になっており、私にとって云わば忘れてならない人である。

その私が、いつしか徳永を忘れともなく忘却していったのである。

しかし、関さんの話を聞いた当時私自身は勿論、「文学碑建立」という大事業に取組む条件は何一つ見出せず聞流しになってしまった。

「徳永直」が、主に教育界の一部で関心を持たれる様になったキッカケは、昭和五〇年（一九七〇）の春熊本大学入試の国語問題に、その作品「最初の記憶」の一節が出題されたことである。

もっとも、それをさかのぼること二年前（一九七三）大学、高校の教育有志の間で「熊本近代文学研究会」がもたれ、熊本中央女子高校の鶴田康己さんの提案で「徳永直」がテーマとして取上げられたと聞いている。その後何回か「徳永直」が研究の相止に上った。その研究の経過が入試出題への要因ともなったであろう。

私と徳永直とのかゝわりが、かねて親交のあつた規工川佑輔さん（現在熊本県教育庁同和教育室主幹）によつ

で紹介された、会員の中村青史さん（熊本大学教育学部講師）から研究会にもたらされ、その翌年の五月、研究会の例会に私は招れた。

私は徳永の古い手紙やハガキ、昭和十八年三月熊本の私の家の前で撮った写真などを持って出席し、思い出話などを披露した。

徳永直の文学について、二三の著名な作品以外読んでいない私にとって、勿論その文学を語る資格はない。

それなのに、徳永の存命中はその名前すら聞いたこともなさそうな若い人達が、徳永の多くの作品に親しみ、そして研究していることは、正に私にとって「驚ろき」であり、徳永によって四十数年前に指し示された大道を、曲りなりに歩き続けて来た私の怠惰が、今更の如く恥しく思われた。

全集も、選集さえも出されていないことも始めて知らされた。

私は改めて数年前の関さんの話を思出した。「徳永直文学碑！」

それ以来、私は機会をとらえては文学碑建立の打診をつづけた。

研究会員の今村潤子さん（現熊本尚綱短大講師）の「

呼びかけの発起人は井上・吉良・私の三人で候補を挙げ交渉を分担した。荒木精之さんを受持った吉良さんによれば、「神風連百年祭の準備で忙しいのでお手伝いは出来兼ねるが、是非実現させたい」と快諾してくれたと云う。

熊本日々新聞社長の島田四郎さんは井上さんと二人で出掛けて、外出先から帰った島田さんとエレベータの前で会うことが出来た。日蓮宗信者の島田さんは合掌して賛成してくれた。

島田さんが若い頃、九州日々新聞（現熊本日々新聞の前身）に働いていた兄さんが、徳永直たちと社内の回覧雑誌を作り、その表紙を自分が描いた記憶がある……と洩らしたことがあると誰かに聞いたことがあり、発起人には島田さんをと私は当初から考えていたのである。

これは後日のことになるが、個人としての資金は島田四郎さんがトップを切ったが、私は島田さんの文学碑についての関心が強く印象づけられた。

予定した発起人の候補は一人の例外もなく賛同して貰われた。

笑い話になるが、発起人候補の顔触を見た熊本展望の宮田恰子さんから、「婦人が一人も居ない」と物云いが

林美生子研究」出版記念会では松本弘さん（当時県中学国語研究会長・白川中学校長）から強い激励を受けた。熊大国語国文の会の懇親会では、中村青史さんから徳永直の知友であると紹介され、酒間に多くの人々の賛同を受けた。

私が事務局を担当している熊本旧友会（戦前の無産者解放運動関係者の組織）の一月廿五日の総会で、私は「文学碑建立運動への参加」を本年度の会の方針として提案した。

勿論、全員が徳永の文名を知っており、中には直接交渉のあった者も居り、出席三〇余名一も二もなく賛成された。

その前後、私は井上栄次さんや吉良敏雄さんをしばしば自宅にたずねた。

井上さんは徳永直が最後に郷里に帰った三十一年九月に、私と共に熊本駅に見送った縁。吉良さんは新日本文学会で徳永と交渉のあった人。——二人は私の企画に喜んで賛成し相談に乗ってくれた。

たまたま上通町で行合った泉三郎さん（元熊本市教育局委員）には、発起人の人選で有益な示唆を受けたりした。

文学碑の建立場所については、当初私は漠然と「他人の中」に出てくる旧若宮米屋付近を胸に描いていた。しかし、一日井上・吉良・渡辺義夫さん（久保田、徳永直研究家）の四人で、絵馬堂・椋天神・黒髪西公園横などを实地踏査したが、面積・地の利など私たちの意に副うものではなかった。「椋天神」のことは「社会主義者の徳永の記念碑などんでもない」と宮總代の古老が洩していることも小耳に挟んだ。

肝心の場所が無いではこの話は一步も進まない。一番大事なことを抜きにして話を進めて来た私の軽卒が悔まれてならなかった。

そこへ井上さんが耳よりな話を持込んで来た。立田山の登山口の竹藪に良い場所があると云うのである。

映画劇場「東映」や「東雲座」の経営者である寺崎フサエさんの亡夫が、戦後財産税に追われた細川家から買受け養老院か保育園を計画していたが、その後県から「風致地区」の指定を受け竹一本切るにも県の許可がいると云う厄介な処になっていた。「個人の私有地を一方的

に自由に出来ない様にして、税金をかけるとは不合理だ」と井上さんが市当局に掛合って固定資産税を免除させた所だ、という。旧友会員の福田政雄さんも寺崎さんの顧問弁護士を引受けていると云うことも分った。

早速井上さんが交渉すると「そんな有意義なことなら」と二つ返事で無償使用を快諾して貰った。

風致地区の現状変更については県議の井上・吉良両氏が県当局に当り、県は計画係長を派遣して実地を調査・内諾を得た。

——かくして敷地問題は一挙に解決、「文学碑建立」運動の第一歩を踏出すことになった。

文学碑の碑文については、徳永文学に造詣深い渡辺義夫さんの提案による「最初の記憶」の末節を採用することになって、東京の津田孝さん（娘婿）の了解を取付けた。

徳永の肉筆を生かすために、津田さんから「草いきれ」の原稿の一部をコピーして貰い、類字を探して画工の手で模写した。

碑の工事は吉良さんの推薦で、永田日出男さんに担当して貰うことにした。永田さんはかつて日本プロレタリ

ア作家同盟に籍を置いたこともあり、旧友会の幹事で私も親しく好都合であった。

永田さんの紹介で、設計は画家の宮崎静夫さんにお願いすることにした。初対面の宮崎さんは村夫子然として真面目な印象を受けた。ソ連抑留からの引揚者で徳永の作品にも親しんだことがあると語っていた。

設計・施工。素人の私達が下手な注文を付けるよりも、とすべて二人にまかせることにした。

原石の選定から碑の完成まで、心の合った両氏によって工事は毎日目に見えて進んで行った。

宮崎さんは住居が近いということもあったが、毎日自転車を馳って現場に乗り込み、文字通りパレンの一章の植込みに至るまで指図してくれた。近くにあって立ち、遠く離れては眺め、まるでカンバスに向う画家そのまゝの姿であった。

全く献身的な両氏なくしては、あの九州にも珍しいと云われる見事な文学碑は実現しなかったであらう。

「呼びかけ」の文案は、民主々義文学同盟熊本県支部の千葉昌秋さんを煩わした。

第一回発起人会は七月三日ニュースカイホテルで開い

た。上級公務員や高齢者が多いので、欠席を見込んで発起人会の案内状には、くわしい経過報告や計画、収支予算の概算などを同封した。

それでも二十名近くの発起人と活動家の実行委員が集った。徳永の末妹大野タツメさんも始めて参加した。

「文学碑建立運動」の第一声は七月九日熊本教育会館における県高教組第三六回定期大会の席上、中村青史さんによって呼びかけられた。

かつては高教組の活動家でもあった中村さんの訴えは、砂地が水を吸うごとく代議員に受入れられた。

募金、「徳永直を偲ぶ講演と映画の夕べ」、短編選集が県下の高等学校の職場に拡ったそのキッカケになった。

翌十日私は上京した。小田急沿線経堂の駅には津田孝さんが、小雨の中を出迎えてくれた。

夜ではあったが、宮坂の家の玄関も、居間も四十五年前を思ひ出させた。

目尻を下げて「ヤー」と徳永直が今にも書斎から出て来そうな錯覚さえ感じた。

所用で外出していた夫人の道代さんが帰って来た。初対面だったが、顔立ちといふ声音といふトシオ夫人生写

しに思えた。

翌日、藤原惟人さんをたずねる予定で、知人に動静を聞くと「藤原さんは最近体をこわして寝たり起きたりの生活で、面会は無理ではなからうか」とのことだった。

そこへ、ひょっこり当の藤原さんが姿を現わしたのに、は吃驚した。

私自身にははっきりした記憶はないが、昭和の四・五年頃、獄中の藤原さんに私がハガキを出し、そのことが藤原さんの文庫本「獄中書簡」？にのっているということとを友人に教えられたことがあり、熊本関係者ということもあって、昔から私は藤原さんには親しみを感じていたし、二三年前熊本で会ったこともあるので、改めての挨拶の必要もなかった。

第一回の発起人会で、藤原さん以外には考えられないとして、文学碑の撰文をお願いすることにきまったことを伝えた。

撰文については、藤原さんは即座に承知してくれた。たゞ、如何にも弱々しく「記念講演に来懇してほしい」とは切出せなかった。

原宿の日本生活協同組合連合会にも立寄った。私が徳永直の紹介で常任になった関東消費組合連盟の委員長故

戸沢仁三郎さんの女婿栗田芳之助さんが勤めて居り、資料室で最近発見された徳水の消費組合運動に関する論文などをコピーして貰った。

当時の日本消費組合連合会の書記長山本秋さんもと、で待って呉れて、徳永文学碑についての「久友会員への訴え」の原稿をその場で書いて貰ったりした。

東京の帰りに博多に立寄った。小林多喜二と街頭連絡中に一緒に捕った革命詩人今村恒夫の碑が、最近筑豊に建てられたことを知っていたからである。

共産党福岡県委員会の関係者からその写真などを見せてもらった。

その碑は、まるで小公園みたいな広い敷地に建っていた。私にはそれが豪華に見えて、とても徳永碑の私の構想など足下にも寄りつけぬものだった。建立資金の収支の間に大きな隔りがあり、跡始末に頭を痛めているという事だった。

趣意書などで熊本の計画を説明したが、「この巾広い発起人では成功しますよ。第一、今村と徳永直では知名度が違いますから」と激励された。

印刷代・通信費など差当りの資金は、計画の最初から

この運動を側面から推進してくれた緒方求也さんの口利きで銀行の借入で賄った。

愈々本格的な募金活動に取りかゝった。先づ趣意書を送る為の名簿集めから始められた。熊本関係の文化団体・民主団体、果ては文芸年鑑まで東京の津田孝さんに頼んで送ってもらったりした。

千葉昌秋・木庭克敏さんに民主々義文学同盟の全国の支部・同盟員、吉良敏雄さんが新日本文学会関係、熊本市民劇場の皆吉政広さんは演劇方面を支持して封筒の宛名書きを分担してもらった。それでも手が足りなくてアルバイトを動員した。

戦前戦中の生活協同組合(消費組合)運動関係者で組織している「生協運動久友会」は副会長山本秋さん(元日本消費組合連盟書記長)は、徳永直がかつて博文館共働社の役員で、関清連の中央委員でもあり、「福重隊よ前へ」「火は飛ぶ」等の作品で我が国で数少ない「生協作家」であった、としてその文学碑建立に協力しようと会員二〇〇名余に訴えを送った。

熊本旧友会は代表幹事の中田哲さんが、地元はもとより他府県に転出している旧友に広く呼びかけた。

かつて徳永直が年少時代文選工として働いた熊本日々

新聞社は、その社内報第五八号で「徳永直は従業員の大先輩」と全社員五〇〇名に訴え、編集委員の平山さんは同僚の一人々に訴えた。又熊日労働組合の手で広くカンパを集められた。

教職にある岩本税・工藤素生・宮田正直・野中輝明・藤川治水・河上良輝・園村昌弘・中村青史・早野知徳・八木孝の十氏は連名で「文教地区立田山に徳永直顕影の一コマを」と同僚に訴える独自のプリントを配った。この頃から高校を中心に、中学校・小学校の職場に次から次へと世話役が生まれて行った。

熊本地区労働組合協議会は「労働者一人一人が参加することに意義がある」と執行委員会が支援をきめ、三〇〇枚のカンパ袋を傘下組合の全職場に流した。

荒木精之・阿部次郎・緒方求也・木下嵩・島田四郎さん等県下文化界・実業界のトップクラスの呼びかけ人は「徳富蘆花と共に郷土が誇る作家徳永直の顕影に、文化事業の育成に理解ある」熊本市内の企業・商社の代表に協力を要請し、主な所には県議会開会中の寸暇を割いて井上栄次・吉良敏雄両氏が連立って訪問した。

作家永松定さん、徳永直研究の専門家である渡辺義夫(久保田)さんが主宰する「詩と真実」の同人・賛助者、

読者などにも「訴え」は拡げて行った。渡辺さんは勤務先の第一高校の同僚はもとより、「詩と真実」関係者のカンパを何回となく届けてくれた。

熊本で精神病院を経営する上妻四郎さんは、五〇枚・百枚と再三封筒と「呼びかけ」を持って行き、学生時代のクラスメート・友人・医者仲間へ切手代も自弁でカンパを訴えた。

当初、見知らぬ人から郵便振替で送金があるので、見当もつき兼ねていたが、それは殆んどが上妻さんの関係と分ってからは、振替用紙の裏に捺印してもらうことにした。

濟々費の岩本税さんも個人で三〇〇名以上の宛名を書いた。学校と近い事務局を何度か往復しては前任地の同僚・教え子・父兄に呼びかけた。岩本さんの活動は濟々費の全日制・定時制の殆んど全教職員がカンパに必ずという結果を生んだ。振替郵便による振込の第一号は岩本さんだった。

吉良敏雄さんも公務党務の多忙の中を、社会党県議団のカンパを集め、市議会議員の柴田徳義さんと相談して、社会党市議団や他党派にも呼びかけた。熊本地区労働をかしたのも吉良さんの働きだった。

「俺を発起人にとつたら、もっと出すはずだが」と沢田一精県知事に冗談を云わせたのも吉良さんである。

総選挙必至の情勢の中で、井上榮次さんもカンパの領収帖をいつも懐中にして、顔見知りには片々端しからカンパを訴えつゞけてくれた。

作家の丹羽文雄さんから大口の寄金が送られて来た時には私も首をかしげた。直接訴えた覚えはなくどうした関係かと思っていたら、東京の林田茂雄さんが自分に来た「趣意書」を廻してくれたことが後日になって判った。七月十七日「赤旗」が文学碑のことを報道したのが、この運動が漸く全国的に拡がるキッカケになった。

参議院議員の春日正一さんには、建設委員として県庁訪問の際立話で応援を頼んだが、「徳永直は私の若い頃愛読者だった」と語り、「公選法で自分のカンパは遠慮するが、この運動には協力する」と励ましてくれた。

共産党国会議員（全国区選出参議院議員を除く）の大半が寄金者名簿に名を連ねているのは、一に春日さんの努力に負うところが大きい。

見知らぬ人からのカンパがポツポツ寄せられて来る様になった。東京の医療機関で勤くという中山長重さんは、「赤旗」で知ったと云って、若かりし頃学歴のない一労働者として徳永直の作品にふれ助けられた。「文学碑の砂利の一粒にでも」と封書に現金を同封してあった。藤川一栄さんは五十年前、氷川生協設立運動に参加し、「太陽のない街」に感激して活動したことなど、つい最近のように思い出すと伝えて来た。

「振替用紙を追送してくれ」と催促して来た作家の桜田常久さんが、熊本関係者であることも始めて知った。演出家の陣ノ内鎮さんは、昔徳永直と世田ヶ谷の千軒長屋で話し合った記憶を語ってくれた。推理作家の西東登さんも熊本生れであることは、カンパして貰って知らされた。

川崎に住む作家の小沢清さんは、東京・千葉・神奈川の知己友人の間をコツコツと足で練いでくれた。故宮崎巖さん（旧姓磯崎、伊東三郎）の未亡人公子さんは三鷹いしずえ会の常任活動の傍ら、周囲の人々に念入りに呼びかけてくれた。

十一月に入ると、全国からの応募は間断なく続いたが、地元の活動が鈍りがちになって来た。世話役の殆んどが何かの形で選挙活動に参加している様子であることが分ってはいたが、私は心細かった。一〇月末で目標額の四〇%にも達していないのだ。

そこえ盛岡に住む徳永直長男光一さんから、渡辺洋子・津田道代・浦林街子の四兄妹分として大口の送金を受けた。

遺族からの援助等思っても居なかったもので、私は一寸とまどったが、先行不安の中で遠慮なく受け入れざるを得なかった。

徳永直の妹、大分の幸冬子さん、神戸の谷口トミさんたちも成人した子供たちと共に一家を挙げて協力してくれた。

特に熊本に住む末妹大野タツメさんは多くの従兄妹たち親戚を廻って資金を集めた。私が恐縮すると「皆さんからこんな援助して貰っているのに、私たち親類がじつとして居られるのですか」が口癖だった。

総選挙が終わると、目立って成績は上って来た。熊本地区労のカンパもまとめて吉良さんから届けられた。追込みもあってか、年末には目標の七〇%に達し、これならゆけると私もようやく愁眉を開くことが出来た。

年が明けてカンパは殆んど振替郵便で毎日の様に届いた。藤沢に住む久友会の友人からは、「忘れていた、盛かだが今からでも間に合うか」と態々長距離電話をかけて来た。まるで今様青砥藤網張りだと思った。

除幕式が済んで、絵はがきを受取った県外の人からは、「収支は償ったか？ 足りなければ今からでも集める」と心配した便りをよこした人は二、三人に止まらない。熊本でも、赤字を氣遣ってくれる人は多い。有難いことである。

「徳永直の人と文学をどうして知って貰うか」
歿後二十年、マスコミから完全と云えるほど忘れられて来た徳永直を、文学碑建立によって現代に甦がえらせることは、単なるカンパ集めだけでは不可能なことは最初から分っていたことである。

そのためには世話人の選定にも、実行委員の依頼にも心を配った。

「徳富蘆花と並ぶ郷土出身の労働者作家徳永直」を広く知らせるためには「講演会」開催と「短編選集」刊行は欠かせないことだった。第一回発起人会では勿論全員が賛同してくれた。

講演会のために拡大実行委員会を開いた。その席上私であることは勿論、女辯として徳永を語るには最も相応しい人であった。一人の反対もなかった。

地元から吉良敏雄さんにも徳永研究の成果を語って貰うことにきまつた。

「徳永直を偲ぶ映画と講演の夕べ」のために特別な実行委員会を作った。責任者の中村青史さんを中心に、宣伝・配券・設営に若い人達が手分けして四十日間になつて走廻ってくれた。

十一月一日はウィークデーだったが、夕方五時過ぎると県立図書館に勤め滞りの人々が次々に吸込まれて行つた。

会は熊本放送木林淳寛アナの司会ではじまり、最初に吉良敏雄さんが「徳永直の人と作品」と題して、発見された徳永直の黒髪小学校時代の学籍簿や、「他人の中」にでてくる事公していた米屋の奥さんの証言などをもとに、黒髪在住中の、そのなかでも幼い頃の徳永直像を裏証的に紹介、さらに「馬」という作品が、労働者の目で語られた作品であることを強調した。次に、東京から馳付けてくれた津田孝さんに「徳永直の文学について」……徳永直の文学が真に労働者の文学たり得ていること、「光をかかぐる人々」に執念を燃やしていたこと、昭和十年代の作品は、「太陽のない街」から戦後のたとえば「静かなる山々」へつないでいく大事な位置にある

って、「短編選集」のことについて了解を求めた。

「明治・大正の、熊本の庶民を描いた感動的な」「真に文学的に完成された作品(前記首藤教授の紹介文)」として選ばれたのが次の七編である。

最初の記憶・他人の中・あまり者・黒い輪・彼岸
冬枯れ・八年制

作品の選択については、熊本近代文学研究会のメンバー今村潤子(尚綱女子短大講師)・金山誠(第二高校教諭)・木村一信(熊本女子大講師)・首藤基澄(熊大教養部教授)・鶴田康己(中央高女教諭)・中村青史(熊大教育学部講師)・三木サニア(信愛女学院教諭)・森塚利徳(菊池高校教諭)・渡辺義夫(第一高校教諭)・和田勉(熊大法文学部大学院生)の十氏、それに私も参加して数回の討議ののちきめられた。首藤さんが中心になつて取纏めた。

解題は、かつて熊大の卒業論文に徳永直をテーマに取上げた若い研究家森塚利徳さんが担当した。

十一月一日の「偲ぶ夕べ」に発行することを旨して、九月に入ってから全員が校正に取組んだ。

私は徳永光一さんから「印税免除」の通知に接した。これで皆も勇気づけられた。

ことなど……を語ってもらった。(津田孝さんのこの講演は、その後加筆整理されて「徳永直は臆病だったか——徳永直文学碑の建立に寄せて——」と題して「民主文学」四月号に掲載されている)

当日の参会者は三〇〇余名。映画の上映があったとは云え、文学的な催しものとしては近年にない盛況だと県立図書館の係員は語っていた。

短い時間だったが、二人の話は徳永直の人と文学を改めて浮彫りにしてくれた。

発起人の藤川治水さんの解説について、映画「太陽のない街」は共同印刷争議の経過、労働者の実態、惨虐な官憲の弾圧、階級的消費組合の応援などを力強くリアルに描き、二時間二〇分にわたり観衆をひきつけた。

入場券は四〇〇枚近くさばけたが、カンパの意味で買ってくれた人も多く、今年に入ってからその代金が届けられた。

結局、経済的にも成功で、剰余金は一括して応募金に繰入れることになった。

七月下旬、熊本近代文学研究会を主宰する熊本大学の首藤基澄教授が、所用のため上京した。津田孝さんに会

装訂は文学碑の設計者宮崎静夫画伯が、折からの県美展出品物製作の多忙の中から快く引受けてくれた。扉のカット「くつわ」は「最初の記憶」に因んだものである。念願通り、「偲ぶ夕べ」の会場に開会一時間前に先づ一〇〇冊が届けられた。我々にとってはまるで珠玉の様な「短編選集」であった。ためつ眺めつ頁をバラバラとめくって見たりした。

「先づ徳永の文学を知って貰う。これなくして文学碑建立の成功は有り得ない」。これが編集関係者の共通した気持だった。

翌日から早速頒布の計画に取りかゝった。県下の高等学校・中学校・小学校の各国語教育研究会長の推薦を取付けて、宣伝文書を関係方面に発送した。

知り合いの書店に連絡して、十冊・二十冊と委託で店頭に並べてもらった。

第二高校からは発売以前から学校図書館備品として五十冊の予約注文があつてた。第一高校も、中央女子高校も、八代第四中も一クラスの人数をまとめて買上げた。付属中・出水中学は図書館備付けに教冊を揃えた。

熊本女子大・熊大教養部・同教育学部・熊本商大・九州短大・福岡女子短大などでは教材に使うために、多

くの数が学生達の手に残った。

編集者が即販売員の役割に就いた。自分たちの手に残った「選集」の消化に、誰もが一生懸命だった。

こゝでも中村青史さんは活動の先頭に立った。講義の持時間以外、席を温むる時間を惜んで、常に愛車のトランクに「選集」を積んで、市内はおろか城北・城南地区を馳駆った。

一人で五五〇冊の数字が、何よりも彼の頑張りを物語っている。

これはいさゝか余談になるが、折からの総選挙の運動に「選集」を活用する戦術も現れた。出入りするのを咎められても「小説を売りに行った」と云ってはぐらされると云うのだ。

俳優の山口崇さんはNHKのロケーションで来熊した際に「選集」を知って、市民劇場に二〇冊を注文して帰った。

熊本日々新聞朝刊の投書欄「読者の広場」には何れも主婦の読後感想が二回も取上げられた。

市内の主な書店からは二度・三度と追加注文が続いた。天草の書店からは「売らせてほしい」と電話で云って来た。

大野タツメさんと、私が左右から盛土に鉄を入れた。

——途端に参加者三〇余名から一斉に拍手が湧いた。私は一瞬眩暈な気持ちに打たれた。もう一步でも後へは引けぬ。何が何でもやりぬくぞ!

カメラマンのフラッシュを浴びながら、私は秘かに決意を固めた。

十五日にはいよいよ石碑の据付けにかゝった。永田さんの工場で既に黒御影の碑文がはめ込まれた石碑は、その八トンの巨体をまるで赤子を抱く様に、軽々とクレーンが吊上げた。

設計者宮崎画伯の指図で本体は定位置についた。添石は予定したものが不釣合だと云うので、宮崎さんはその場で代りの石を、と八キロ離れた百貫港の材料置場にトラックを走らせた。

——一切を宮崎・永田両氏にまかせていた私達にとっ

てはじめて接する碑石だった。

菊池川水源の山林から探して来たという巨岩は、どっしりと頼もしく、見るからに安定感に満ちていた。石碑の前方入口右手には、「徳永直文学碑」の標示碑が驚払いの如く据えられた。馴れない私が筆をとった四寸角の六文字を彫込んだものである。

全国的な販路に乗せたかったが、流通マージンが出ず残念ながら見送らざるを得なかった。それでも、どこから伝わったか東京神田の「文学書専門」の店からの注文も来たりした。

渡辺義夫さんの尽力で、県高校教育研究会図書館部会が「高校生のための一〇〇冊の本——文学作品へのレファレンス——」の中に新しく「短編選集」を指定した。

この小冊子は、本年度高校新生約一万数千名に頒布されて居り、この夏の読物として新しい徳永直の愛読者が誕生するだらうことが見込れている。

「選集」の発行が「カンパ」を自然に誘ったことは云うまでもあるまい。

ただ残念なことは、発行を急いだこと、不馴れのため、校正ミスが一〇〇個所以上も出て来たことである。再版の機会があれば改めたいと思っている。

尚、「徳永直研究会編集」となっているが、便宜上そうしたもので、特定の研究会があるわけではない。強いて云えば「熊本近代文学研究会徳永直研究班」であらう。

十月卅一日、現地で起工の「鉄入れ式」が行われた。津田孝さんが遺族を代表して挨拶の後、徳永直の末妹

熊本の二月、殊に今年の冬は厳しかった。登山口と云っても頂上に近い立田山の中腹。吹きさらしの場所です長時間、しかも立ちづくめの除幕式は考えられず、ごく短く一時間以内での式を計画せざるを得なかった。狭い道路で、時折り自動車も通るのでテントを振ることも出来なかった。

ところがどうだろうか。前の日から壁の様に寒気がピタリと止った。日中、真冬には珍しい春をおもわせる暖い日射しが、私にとって殊に嬉しかった。

雪の盛岡から長男の光一さんが、長女あかねちゃんを伴って熊本空港に降りたのは前日の朝九時過ぎ。

こゝで私と光一さんとの因縁を語らせてもらおう。

昭和三年七月、同郷の友人土口實雄と、勤め先の家庭購買組合高田馬場作業所で、賃上げ要求のピラを激して戸塚署にやられ、一週間して出て見ると二人共クビになっていた。

経堂の徳永直に身の振り方を相談旁々遊びに行くと、「ちようど良かった。明日から長野県下に講演に行くので、女子供相手に留守着してくれ」という。噓や嘘わずの二人にとっては、文字通り渡りに舟。

その何日間かの遊び相手が光一さんであった。まだ小学校に上る前で、レコードに合わせて「証じょう寺の狸ばやし」を一緒に歌わせられたことが、なぜか今でも強く印象に残っている。

——四五年目に、農学博士・岩手大学教授の光一さんを、果して自分は覚えていたのだろうか。

「兄の葬式以来二〇年振り」と云う、直の妹谷口トミさん、大野タツメさんが成長した姿を出迎えに来ていた。

だが、不安は杞憂だった。長身の紳士を見た時、長年の断続は一瞬にして消えた。あの光一さんだ。真ッ先に私はツト手を差出した。

二月十二日、天も「徳永直、郷土に甦る」のを祝福するかの如く紺雲に晴れわたっていた。

正一時。爆竹が威勢よく続けて山の静寂を破った。

右手に直の孫徳水あかねちゃん（一二才）と大野タツメさんの孫土士君（四才）、左手に私の双生児の孫美樹（六才）美香（六才）が、それぞれ碑にかけられた白布の端をにぎった。

サッと白布が引かれた。参会者の間から期せずして嵐の様な拍手が起った。

こゝに「徳永直文学碑」は厳として登場したのである。中村實史さんの経過報告について、長男光一さんが亡き父への郷土熊本を中心とした顕彰に対して心からのお礼の言葉を述べた。

津田孝さんも、日帰りの予定で駆けつけてくれた。

予定通り四五分で除幕式は終った。参会者全員はそのまゝニュースカイホテル行の大型バス二台に乗込んだ。

二時三〇分、「ドドン・ドドン」と囂響く太鼓は祝賀会の開始を知らせる合図。

と、一転会場の照明が消えた。暗闇の中に一本細い光茫が注がれた。

「……私はよく母といっしょに、箆をかきつけて熊本市の「朝市場」まで竹箆を売りにいった。二つの箆を天秤棒でつっかけて、調子よく軋み音させながら担いでゆく母の背後から、私も小さい草鞋を履いて小走りについてゆく。部落からそこまで約一里半。母はいつも途中で三度くらい息をいれた。

「竹箆は要らんかいな」……」

「最初の記憶」の一節が高橋千枝元RKKアナウンサーによって語られ出した。静寂の中にそれはすきとおって会場をすっぱり包んでしまった。

私はグッと胸に來た。突上げてくる様な感動はどうしようもなかった。思わず私は目頭にハンケチを当てた。

熊本市が毎月市内一五萬八千世帯（五月末現在）に配付する「市政だより」六月号は「ふるさと、熊本の文学」という新しい企画の(1)に徳永直を取上げ、一七〇〇字のスペースに文学碑と、ゆかりの地藏堂などの写真ものせて紹介しているが、今度の運動の盛り上の大きな力になつたのは、地元報道機関が最初から最後まで協力してくれたことである。

その「壘」は末尾の資料にくわしいが、かつて一人の作家が一地方で短い期間に、かくも語られたことがあつたであろうか。徳永直は幸わせ者である。

特に、熊本日々新聞が社主権であるかの如く間断なく関心を示してくれた。社長島田四郎さんの熱意が全社に伝わつたのかも知らないが、別に指示があつたと云う話も聞いていない。

熊日は四月一日創立三五周年記念として「熊本の百年百人」を特集した。

「熊本の百人——近代化への群像」。賑うつ肥後人気賞、多くの分野ですぐれた功績」として、選出の基準を「明

治十年以降活躍した人で原則として熊本県出身者」「各分野で全国的に評価される人物」……等においた。

本紙に添えた二四頁の部厚い頁をめくっていたその十五頁に「徳永直」を発見した時の私の驚き。そしてそれは、熊日が徳永直に対して高い評価を与えていることへの感謝に変わって行つた。

文学碑建立の運動が成功しなければ、「熊本の百人」に熊日は徳永直にその座を与えなかつたに違いない。

と同時に熊日の積極的な態勢なしには、文学碑運動の短期間の成就是困難であつたらう。

以上、「文学碑建立」は良いことづくめの様に見えるが、果してすべて完全であつたであろうか。

振り返つて、運動の過程で幾多の欠陥が生じたことに気が付く。

第一に、現場で顔に汗する労働者への働きかけが殆んど欠けていた。少くとも徳永がかつて年少時代働いた専売局労組や、直接労働者への宣伝活動が全然行なわれなかつた。熊本に数多い中小印刷工場へ「昔の仲間徳永直」を、短編選集や「太陽のない街」で知らすべきではなかつたか。

勿論、熊本地区は協力を惜しんでいない。しかし「徳永を読ませる」ことは忘れられていた。職場の売店や購買部に「短編選集」の委託をなすべきであった。

第二に、活動がその場当りで、組織的ではなかった。発起人会は最初の一回だけ。実行委員会は数回もたれたが、便宜的に活動家を集めるだけで、明確な任務の分担もなく、機関の確立が最後までなされなかった。

そのために、例えば数多くのニュース、パンフが末端まで果して届いたかどうかも疑問であり、点検すべきすべもなかった。

その他、多くの反省があるが、たゞ云えることは、事実上中心にならざるを得なかつた私の非組織的な無能力さに一切の責任があることである。

しかしながら、「文学碑」は成功した。その第一の功勞者に「中村青史」さんを忘れてはならない。

私はこの記録をまとめながら、中村さんの活動がその中心であつたことに今更の如く頭が下る思いである。

勿論、多くの世話役、活動家に支えられて来たことであるが、常にその核は中村さんであつた。

無論すれば、中村さんなしには果して今日「文学碑」が建つていたであらうか、とさえ思われる。

因みに、「文学碑」の命名も彼中村さんによるものである。

かくて「徳永直文学碑」は建立された。それは没後二〇年、「徳永直」の文学について、改めて親しまれ評価されるキツカケを作つた。

熊大首藤教授が云うごとく「徳永直研究の起爆剤」が投ぜられたのである。

熊本近代文学研究会は「徳永直研究誌」第二号の発行を予定しており、従つて徳永研究も当分継続されることになつてゐる。

しかし、研究会はその学究的性格上メンバーの急激な増加は望むべくもないし、又好ましいこともあるまい。私にとつて「文学碑建立」を契機として「徳永直」を甦えさせる任務は大きい。

徳永文学を広く読ませ研究して貰うこと、そのためにも全集又は選集刊行の世論を結集すること、徳永直とその文学に関する資料を発掘して研究者、読者に提供すること等々。

そしてそのことが、新しい「働く者の手になる文学」を生み出し、「徳永直」につゞく作家の育成にも役立つであらう。

資料

(五一、二、五二、六)

報道

文学碑建設計画

幸いにして毎年二月十五日の命日に「孟宗忌」の集いを行い、徳永とその文学を語る一日とすることが有志の間できめられた。

徳永とその文学は、碑建立で終ることなく、まさしく新しい出発点に立つた。

紋切型の様だが、今后とも一層のご教導、ご協力をお願いしたい。

(一九七七、七、一夜)

熊日夕刊六、二二 「徳永直の文学碑をつくる会」近く募金運動へ

熊日朝刊六、三〇 (読者のひろば) 「太陽のない街」

に光、徳永直の文学碑建設(投書)上益城・仁田脇三雄

熊日朝刊七、四 徳永直文学碑建立に初会合

熊本民報七、一一 徳永直文学碑建立準備すすむ

赤旗七、一七 徳永直の文学碑づくり、生地の熊本ですすむ

読売熊本版七、二六 (くまもと文化) 熊本に徳永直

文学碑、「つくる会」来年二月に完成

赤旗八、一一 (読者の声) 徳永直文学碑を作る運動

にご協力を(投書)熊本市・藤本豊高印刷業

熊本民報九、一九 「徳永直文学碑をつくる会」会報発行、建設募金急ピッチ

赤旗二、二二 建立待つ徳永直文学碑、年内竣工へ急ピッチ

徳ぶタバ・起工式

熊日夕刊一〇、二五(短信) 来月一日に「徳永直を
徳ぶタバ」

熊日朝刊一一、一 「徳永直碑」の起工式、「しのお
タバ」予告

熊日朝刊一二、一六(文化コーナー) 徳永直文学碑
の据付け、熊本市立田山登山口

急ピッチ

短編選集

熊日朝刊一一、一〇(出版トピックス) 徳永直短編
選集を刊行

熊日朝刊一一、一七(読者のひろば) 徳永直の見直
しをよるこぶ(投書) 熊本市・柘植周子主編

熊日朝刊一一、二九(読者のひろば) 「ひろば」で
巡り合った徳永直(投書) 熊本市・永野由美子主
婦

読売熊本版一一、二九 徳永直の「短編選集」出版、
研究会が編集

熊日朝刊一二、三〇 県文化界この一年、徳永直文学
碑、短編選集

熊日朝刊五二、一、二四(読者のひろば) 徳永直の
もう一つの作品(投書) 熊本市・金森厚子主編
赤旗一、二四 募金運動とともに広める「徳永直短編
選集」

熊日朝刊二、九(読者のひろば) 労働の尊さ語る徳
永作品(投書) 熊本市・松本修一主編

除幕式

日経二、一二付 徳永直の文学碑、三〇〇〇人がカン
バ、郷里熊本に建立

西日本熊本版二、一三付 除幕式記事

朝日熊本版二、一三付 徳永直文学碑が完成

読売熊本版二、一三付 徳永直文学碑が除幕
熊日朝刊二、一三 「徳永直文学碑」が完成、遺族招
き除幕

全国商工新聞二、一四付(読者のひろば) 徳永直歿
後二〇年、文学碑建立に支援を 大阪・中谷仁(投
書)

赤旗二、一七 徳永直文学碑が完成、七〇人参加、孫
たちの手で除幕

テレビ

NHKローカル(熊本県内・長崎・佐賀の一部)

一一、一二朝七・二〇分より一五分間、午後二時二
五分より再録

話題の窓 徳永直顕彰一役後二〇年

企画 前川鉄夫ディレクター

聞き手 藤沢アナウンサー

語り手 中村育史

「徳ぶタバ」ニューススタジオお知らせ一〇・二九
と三〇日

除幕式報道 ニュースの時間 正午・七時のローカ
ル

RKK

二、一〇午後六時ワイド6 熊日レポートの時間

徳永直の人と文学 熊日社会部長 平山謙二郎

二、一二午後六時ワイド6 除幕式の模様

ラヂオ

二、一七朝七・四〇より八分間 朝のロータリー

聞き手 佐野アナウンサー

語り手 徳永光一

評論・随想

久保田義夫 コトバの光と影―庶民作家「徳永直の場合」
西日本新聞五一、二、一一

久保田義夫 徳永直と熊本―屈折した里郷の思い 熊日
七、三

今村潤子 徳永直の文学―その再評価にあたって―漂う
庶民の哀歎、熊本に培われた反骨精神

吉良敏雄 徳永直の思想とその文学 熊本県総評新聞一
一、二〇より三回連載(旬刊)

首藤基澄 「徳永直短編選集」刊行に寄せて 熊日一一、
二二

久保田義夫 徳永直と金釘坂 朝日熊本版 一一、二九
(熊日新生面―コラム) 徳永直は熊本でもっと語ら
れている作家だと思ふ 熊日五二、二、八

首藤基澄 故郷での復権めざす―文学碑建立と短編選集
出版 朝日熊本版二、二二

首藤基澄 徳永直と庶民―働く者の現実を生き生きとし
朝日三、一九

佐田裕子 徳永直文学碑 西日本三、二九

雑誌・単行本

- 西田文司 徳永直論 熊本新評一二月号
渡辺義夫(久保田) 思想するものと感情と―徳永直の
文学序説―「徳永直研究」創刊号五二、一
森塚利徳 転向論の試み―徳永直「先遺談」―「徳永直研
究」創刊号五二、一
久保田義夫 白いぶよぶよした奇怪なもの 詩と真実
()
久保田義夫 徳永直・静かなる山々 日本談義第三一
号
中村青史 孟宗忌由来―徳永直文学碑のことども―北方
文芸四月号
中村青史 徳永直文学碑顛末記 日本談義四月号
久保田義夫 徳永直の懺悔告白 日本談義四月号
津田 孝 徳永直は臆病だったか 民主文学四月号
渡辺義夫(久保田) 徳永直論五二、五 五月書房
佐田稲子 立野信之と徳永直の文学碑 新潮六月号

「徳永直文学碑をつくる会」

徳永直研究会編 徳永直文学碑をつくる会発行

徳永直 短編選集

文庫本型
五〇〇円

収録
作品

最初の記憶・他人の中・あまり者
黒い輪・彼岸・冬枯れ・八年制

● 広津和郎

私は徳永直を現代の日本文壇で最も小説のうまい作家の一人だと思つてゐた。誇張がなく、ツケ焼刃がなく、一番身についた平易な文章によつて的確に事象を描いて行く技術と訓練とは、見上げたものである。所謂芸術派といわれる人々の間にもこのくらい身についた技巧をもつて、些かの危げなく小説を書いて行ける作家は幾人もあるまい。

徳永直 新日本出版社発行

太陽のない街

新日本文庫
三三〇円

大正15年の正月をむかえた東京小石川の印刷労働者長屋は、作業日数大幅ダウンを告げる会社側の発表におとそ気分もふきとばされた。せまりくる昭和恐慌と中国侵略の前に、ここに労働者と資本家とが死力をふるひしぼつてたかう共同印刷の抗争の幕が切つて落とされた。その渦中にあつた著者が描く名作。

(解説 津田 孝)